

私はのんびりコーヒーを飲み、妻は食品スーパーの広告をパラパラとめくっている。静かな朝。

「子育てが終われば、こんな日常になるのかな…」ふと、夫婦二人だけの生活を思った。

結婚して1年後に妻は三つ子を産んだ。「二度に3人は大変でしょう」。よく言われたが、そうでもなかった。楽しかった。8年後、子どもたちを自然の中で育てようと、東京近郊から栃木県に引っ越した。山から水を引き、家族で小屋を建て直し、子どもは林の中で遊んだ。妻は木の間にロープを張って洗濯物を干し、私はベンチに座ってそれを見ていた。楽しい暮らしだった。子どもが高校を卒業し、それぞれの夢に向かって家を出ていく頃、住居も引っ越し、これで子育ては終わったと思った。しかし、それは新しい子育ての始まりだった。

児童虐待防止を目的としたNPOの立ち上げに関わり、子どもを保護するために里親になった。その5年後には、里親として複数の子どもを受け入れる「ファミリーホーム虹の家」もス

族になっていった。私の部屋の壁には、自立していった子どもたちの、昔の写真が張ってある。小学6年生の子と幼稚園に4歳の子を迎えに行き、大谷川の河原で撮った写真。夕

寝ぼけて私たち夫婦の間で飛び起きて、「ママに会いたいよう」と泣いた。小6の子は母子家庭で育ち、家族で遊園地に行った翌日に母親が倒れ、数日後に亡くなった。他にも、親から虐

く、親の事情を背負って生きていく子どもたちなのだ。

19人の里子たち



はたけやま
のりお
畠山 憲夫



タートし、子育てに追われる日々が続いた。里子たちは次々に自立していき、現在は高校生の男子1人になった。19人目の里子だ。楽しかったこと、うれしかったこと、つらかったこと、後悔していること。今、里子たちのことを考えると、さまざまないが浮かんでくる。里子はどの子も緊張してやって来て、やがて家

暮れ、男体山の空がオレンジ色に染まっていた。小6の子はポケットに両手を突っ込み、肩をすぼめ、下の子はひょうきんに体を90度に曲げ、ピースサインをしながら2人で笑っている。そんな子どもたちの笑顔が私にはいとおしく、そして悲しくもあった。

待を受けていた子、ごみ屋敷に兄弟だけで住んでいた子、親が育てきれなかった子など、事情はそれぞれだが、ほとんどが自分ではな

く、親の事情を背負って生きていく子どもたちなのだ。今、栃木県にはこのよう

な子どもたちが約600人いる。そのうちのおよそ8割は施設で暮らし、2割弱が里親家庭で暮らしている。困は子どもたちの家庭での養育を優先するとし、栃木県でも一昨年、里親制度の包括的な支援を行う「栃木フォスターリングセンター」が開設された。

こうしたセンターの活動を通して、里親制度を、より多くの人に知ってもらいたいと思う。生まれた家庭で暮らすことのできない子どもたちが、背負った荷を下ろすことのできる、そんな里親家庭が増えることを、私は願っている。

とちぎ家庭養育推進協議会代表理事。フリーの映像ディレクターとして28年間、テレビ番組を制作。2005年に日光市での児童虐待防止のNPO法人立ち上げに参加し、里親となる。10年にファミリーホーム「虹の家」を設立。21年より現職。県里親連合会会長。東京都出身。同市在住。67歳。